

主張 その116

「老後の沙汰も」

医療法人社団慶成会 会長 大塚 宣夫

今年一月で八二歳になった。

顧みれば三十代半ばに、現代の姥捨て山のような高齢者施設を目にした。そのあまりのすさまじさに衝撃を受け、せめて自分の親だけでも安心して預けられるような施設は出来ないものかと考え、一九八〇年に病院という形でスタートさせた。

思いだけはあったものの、知識、経験、技術そしてお金、まさに「無い無いづくし」のなかで、大混乱の毎日。思い出すだけでもゾツとするような二、三年を経て、当初の思い「自分の親云々」への道が始まったように思う。

事業の構造は、専ら家族の要望にいかに応えるかであった。理由は簡単、①数ある施設のなかで年老いた

親や伴侶の預け先として当施設を選

んでくれるのは家族 ②毎月の費用

負担をしてくれるのは家族 ③当施設

への評価をし世間に伝え、次のお客

様を連れてきてくれるのも家族、

だからである。歩んだ道は、入院者

にともかく家族の望む生活をしてい

ただくこと。要約すれば①規則正しい

生活、朝は決められた時間に起こ

し身ぎれいにし、ともかく起こし

ハビリに励んでもらい、夜は早めに

寝かす。②食事は三食完食を目指す。

③家族の全員があきらめるまで持

てる技を駆使して延命をはかる。とい

たところであったように思う。

そんななかで、我が母や家内の父

も当院で四、五年の介護を受け長寿

を全うしたが、晩年の母は私の顔を

見るたび「お前もこの年齢になれば

分かると思うけど、長生きするって

本当に大変なことなんだよ」と繰り返

返し言っていた。当時の私の理解と

しては、体の不自由なことへの不満

位にしか思わなかった。

しかし、私自身が七〇歳を超えた

頃、突然ひらめいた。確かに入院者

の家族の思いは、前述のように規則

正しく、清潔に、常に前向きに生活

させてくれるところにあるとしても、

人生の最晩年を迎えた当の高齢者の

望みは奈辺にあるのだろうか。そう

思った途端に全く別の世界が見えて

きた。社会での役割を終え、他人の

助けなしでは日常生活を送ることが

できなくなった我が身。朝、決めら

れた時間に起こされ、三食完食を強

いられ、身ぎれいにしてリハビリに

励む。さらには自分の意思とは関係

なく食事を口から流し込まれ、点滴

やチューブの下で生かし続けられる。

これって一体何のため？誰のため？

これまで周囲のため、家族のために

充分気を使いながら生きてきたのに、

人生最後までその路線で行けとい

うのか。

私だったらゴメンだ。朝は目覚め

るまで寝かせておいてほしい。食事

も目の前に出してくれるのはよいと

しても、食べるのは強制しないでは

しい。頻回の入浴なんて真つ平ゴメ

ン。リハビリに精を出してこの先何

をしるというのか。痛みと苦しさを

え何とかしてくれれば、他人のため

に長生きなんて糞くらえ。といった

ところである。

しかしながら、これって意外に難

しい。入院者の家族の意を受けての

行動である分には家族からお金も

らえる。でも本人の希望通りにする

となった途端、ご家族の目には職員

が手抜きをしているように映り、そ

の釈明に余計手間がかかる。医療保

険や介護保険からの支払いだって減

るだろう。

となると、最晩年、自分の我がま

まを通してもらうとなるとそれ相応

の経済的負担を覚悟するしかないよ

うに思う。ここでも「老後の沙汰も

金次第」ということか。

「老人の専門医療」を問い続ける

医療法人鴻池会

会長 平井基陽

老人の専門医療を考える会の二十五周年記念誌「四半世紀の歩み」を刊行して一十七年が経過した。老人の専門医療を考える会のホームページは事務局の役割を担ってくれている安藝さんのお陰で、定期的に更新され、機関紙「老人医療NEWS」の創刊号から現在のものまでのバックナンバーが掲載されている。

今回、改めてホームページを閲覧し、記念誌の資料を読みながら、老人の専門医療を考える会の活動を思い起こした。老人病院なる用語が公的に使われるようになったのは一九八〇年代に制度化された特例許可老人病院の創設からだと思うが、当会の活動はその成り立ちに大きな影響を与えた。そして、我が国における老人医療制度のありように関して様々な提言を行ってきた。

精神科に従事していた私にとって「特例許可」は大きな抵抗とはなら

なかった。なぜならば精神科病床は一般科病床（一般病床）より医師数、看護師数の配置基準が少ない「特例許可」の下で運営されていたからである。当初、老人病院が悪徳病院と同一視されたのと同じように精神科病院（以前は精神病院と呼ばれた）も悪徳病院の代名詞となった時代もあった。

しかしながら、当会に参加させていただいた三十数年前は「老人医療」なる言葉が新鮮で、精神科医療の閉塞感に悩まされていた私にとって医療施設経営者としての活路が見いだされる分野になるのではないかと、ときめきを感じたことを思い出す。ところで、当会で一貫して使用してきた「老人」であるが、時代の経過とともに何か違和感を抱くようになった。当会発足当時は、老人福祉法があり、老人病院制度施行の根拠法律であった老人保健法が制定され

た関係で、「老人」を使うことが当たり前であったのであろう。

次第に、世の中が「独居老人」や「痴呆老人」など負のイメージがある「老人」から「高齢者」に変わっていく中で、頑なに「老人」を使い続けたことに当会の存在意義があるように思った。当会主催の全国シンポジウムのメインテーマは毎回、「どうする老人医療、これからの老人病院」であった。

一方、高齢化が進む中で今から七年前に日本老年医学会は運動機能、認知機能、病気の発症率や死亡率などを検討した結果、世界保健機構が定めた「高齢者」の定義を六五歳以上から七五歳以上に引き上げること提言した。つまり、日本人はこの半世紀で十年若返ったということになるであろう。

このような中で、七八才の自分自身に「老人」にふさわしい出来事が振りかかってきた。一昨年の、職場の定期健診の折に心電図で虚血性変化が強くなっているとのことで、「念のために心臓CT」を強く勧められ、昨年の春にやむを得ず大学病

院で検査をうけることになった。その結果、「心臓の方は冠動脈狭窄はあるものの、血流はそこそこ保たれているので血圧の管理で様子を見ましょう」とのことであったが、さらに続けて「このCTで偶然にも肺腺がんが見みつかりました」と言われた。それからは、当然のごとく精密検査のレーンに乗せられ、一ヶ月のうちに「左肺下葉の肺腺癌、ステージ1」との確定診断が行われ、これも当然のように摘出術が用意された。

昨年夏に内視鏡手術腫瘍の摘出がおわり、「全て取れました、これで大丈夫です。抗がん剤投与も必要ありません」と言われ、一度は日常生活に戻ったが、術後半年のCT検査で「非常にまれなケースですが、がんが再発しました。今後は化学療法の適用になります」とのこと今年に入って抗がん剤の投与が始まった。

ところが、二回目の抗がん剤点滴後、今度は副作用の「薬剤性の間質性肺炎」になり二週間の緊急入院となった。今後は老人患者の立場から、主治医とともに老人の専門医療を問い続けて行こうと思っている。

アンテナ

医療サービスの低下が政権交代の引き金

今年の夏はパリオリピックと世界中が選挙で揺れ動いている。

七月四日のイギリス下院（定数六五〇）の総選挙では、野党・労働党が二〇九議席を増やして四一議席の単独過半数を獲得し、十四年ぶりに政権を奪還。キア・スターマー党首はこの結果を受けて五日午後、バッキンガム宮殿を訪問。国王から組閣を要請され、正式に新首相となった。一九九七年に政権を奪還した労働党のブレア首相は、国民保健サービスNHSを診療待ち時間がないファーストクラス・サービスにすることを公約に掲げ、約十年の長期政権だった。後を継いだブラウンは二〇一〇年の総選挙で保守党のキャメロンに大敗した。その後、メイ、ジョンソン、トラス、スナクとバトンが渡ったが、ユーロ圏との関係も経済の立て直しもできず政権を維持できなかつ

た。論点のひとつが、NHSの待ち時間が長くなり、入院医療に対する不満が解消出来るのかどうかだった。

イギリスのNHSは、終戦後の日本にとつて憧れであり、チャーチルの「ゆりかごから墓場まで」という福祉国家建設の理想は、国際的にも高く評価されてきた。しかしながらそれは、理念や仕組みへの評価に過ぎず、イギリスの医療の質的水準が

世界最高と評価されたことはほとんどない。医師を登録医制度として原則医療費を租税で賄うことは素晴らしいことであると考える人々が多いと思うが、税金ですべて賄う医療サービスは競争原理が働かないので患者サービスの質が向上しないという事実を直視していない場合があまりにも多すぎる。

多くの選挙民は、国際政治より日々の家族への所得保障や医療サービスに高い関心があるので、そのサービスが低下すると一気に不満が噴き出すことを為政者は知るべきだ。

ウクライナでのプーチン戦争、ガザのイスラエル戦争は世界のパワーバランスを転換させ、世界経済を混

乱させている。戦争の恐怖は、身近にある。中ロ北朝鮮の同盟を中心とする権威主義勢力、自由と民主主義勢力、そしてイスラム社会が中心の勢力は世界を三分割しているが、注目しなければならぬのはイスラム文化圏だ。

報道によると、七月五日にイランで行われた大統領選挙の決選投票は、欧米との対話を重視する改革派のペゼシキアン氏が当選し、欧米と対立を深めてきた外交政策の転換を図り、関係改善を目指していくことになりそうだ。ただし、イランでは安全保障などの重要な問題については、最高指導者のハメネイ師の意向が大きく働くため、新たな政権のもと実際にどこまで政策転換を実現できるかは不透明だと報道されている。

二〇〇一年の九一一以降、アメリカとイスラム圏との関係は最悪を繰り返してきた。この対立関係がテロの温床であり国際紛争の火種であり続けているので、改革派の新大統領に期待したい。そして、イスラム世界は、医療サービス水準の向上に取り組むべきだと思う。

七月七日投開票のフランス総選挙は、世論調査で二位が予測されていた左派連合「新人民戦線」が議席数で首位に立ち、首位とみられていた極右「国民連合」が三位に沈む結果となった。パリ中心部では「左派支持者が歓喜し、極右支持者は落胆した」と報道された。マクロン大統領の不人気には、年金給付水準引き下げ断行への反発がある。

最近の欧州の政治では、移民排斥、愛国主義的自国利益追求型の極右勢力の拡大が注目されていた。どこまでも移民を受け入れようとしてきたドイツの政治的影響力は低下し、地球温暖化に対する危機意識、物価高、好転しない景気、そして社会保障財政危機で、フラストレーションが高まってきている。裏をかえせば、年金や医療サービスに対する不満が引き金になつている。だから、医療サービスの水準を低下させないことが政治の使命なのだと考えられる。

へんしゅう後記

いよいよマイナ保険証への切り替えを迫られている。困らないとやる気にならないのは悪い癖かしらん。